

別紙1-1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 石 井 僚

論 文 題 目

青年期における時間的展望とアイデンティティ形成

論文審査担当者

主 査

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 氏家達夫

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 平石賢二

名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授 河野荘子

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

提出された論文をもとに、審査担当者 3 名により論文内容の審査を行い、さらに提出者に対する口述試験を実施した結果は以下の通りである。

本論文の目的

本論文の目的は、青年期の時間的展望とアイデンティティ形成について検討することであった。特に、時間的展望に関しては、過去、現在、未来という全ての時間、そして人生の終点である死までの展望を持つことについて焦点を当て、アイデンティティ形成に関しては、そのプロセスとプロダクトの両方に焦点を当てて検討を行った。

本論文の構成

第 1 章では、これまでの時間的展望およびアイデンティティ形成に関する先行研究をレビューし、その問題点について論じた。先行研究の問題点として、時間的展望について検討する際、その検討対象が未来という時間に偏重しており、現在や過去という時間についても検討する必要があることを指摘した。また、同じく時間的展望について、死という人生の終点を踏まえた時間的展望を持つことが青年期発達に関わることが指摘されている一方、その実証研究がなされてきていないことを指摘した。アイデンティティ形成については、特に時間的展望との関連においては、形成がなされたプロダクトにばかり焦点が当てられており、プロセスとプロダクトの両方に着目して検討を行う必要があることを指摘した。最後に、これらの問題点を乗り越えるための本論文における方法論について論じた。

第 2 章では、時間的展望の認知的側面である時間的指向性について、未来のみでなく現在や過去という時間についても検討を行うための方法論の検討を行った。研究者によって扱い方が異なるなど概念的に未整理な状態であった時間的指向性を、時間的連続性および時間意識の 2 下位概念に分け、研究 2 では時間的連続性を測定するための方法の作成およびその信頼性と妥当性の検証を、研究 3 では時間意識を測定するための方法の作成およびその信頼性と妥当性の検証を行った。これらを通して時間的指向性に関する概念整理が行われたことで、矛盾の見られた先行知見が統合され、今後の検討を系統立てて行うことが可能となった。

第 3 章では、過去、現在、未来をすべて含む時間的展望と、アイデンティティ形成のプロセスおよびプロダクトとの関連について検討を行った。研究 3 においては、Luyckx, Goossens, Soenens et al. (2006) のアイデンティティの二重サイクルモデルに基づき、各形成プロセスと各時間的態度および時間的展望プロフィールとの関連について検討した。その結果、過去に対する否定的な態度が探求のプロセスと関連していること、未来に対する肯定的および否定的な態度が、アイデンティティ形

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

成を進める全てのプロセスと関連すること、そしてそうした未来や過去に支えられる現在に対する態度が、アイデンティティ形成の各次元と関わっており、特に否定的な現在への態度とコミットメント形成のできなさが関連することが示された。また、時間的展望プロフィールに関しては、肯定型および過去否定型の青年が、各アイデンティティ形成プロセスに傾倒していることが示された。研究 4 においては、Crocetti et al. (2008) のアイデンティティ形成の 3 次元モデルに基づき、各形成プロセスと時間的態度および時間意識との関連について、アイデンティティ形成のプロダクトの様相に分けて検討した。その結果、アイデンティティ形成の初期においては、過去への意識の高さが、中期以降では現在と未来への意識の高さが、アイデンティティ形成の各プロセスと関連することが示唆された。また、アイデンティティ形成の初期においては過去の受容のできなさがコミットメント対象の探索に、中期においては肯定的な現在と未来が各形成プロセスに、後期においては肯定的な未来と現在がコミットメントとその維持につながることを示唆された。これらの研究を通して、アイデンティティの形成に、時間的展望は未来のみでなく、過去や現在も関連していること、そしてそうした関連は、アイデンティティの形成がどの程度進んでいるかに応じて異なることが明らかになった。

第 4 章では、終点を踏まえた人生全体の時間という視点が検討されてきていないという問題点を解決するため、死について考える課題に取り組ませることで、終点を踏まえた人生全体の時間について検討した。研究 5 では、研究参加者を死について考える課題を行う群、生きがいについて考える課題を行う群、死や生きがいは無関係なものについて考える課題を行う統制群の 3 群に分けて実験を行った。その結果、死という終点を踏まえた人生全体の時間という視点を持つことは、人生の有限性を再認識することであり、その結果として、目標への指向性や現在の充実感を高めるなど、時間的態度が肯定的になることが明らかとなった。研究 6 では、研究 5 の結果を受けて、死について考えることの時間的態度への効果の個人差について、時間意識、死の捉え方の観点から検討を行った。その結果、現在への意識を高く持つ場合に、死について考えることが目標指向性や現在の充実感を高めることが明らかとなり、アイデンティティの確立という青年期の発達課題との関連が窺われた。研究 6 の結果を受けて、研究 7 では、終点を踏まえた人生全体の時間という視点が、アイデンティティ形成にどのような影響を与えるのかについて検討を行った。その結果、死について考えることは、コミットメントを持っていない青年に対して、その形成を促すような効果を持つこと、そしてその効果は、死という終点を現在から近いものとして考えさせるか、遠いものとして考えさせるかによって異なることが明らかとなった。コミットメントは持っていないが探求はしている青年の場合には、

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

不安もありながら死への関心も強いため、青年の持つ短い未来展望の中で訪れる近い死について考えることが効果を持っていた。一方で、コミットメントも探求も持っていない青年の場合には、潜在的な死との連合も強いため、これからも続く人生の後、遠い未来に起こる死について考えることが効果を持つことが明らかとなった。

第5章では、本論文の総括的討論として、本論文の意義、本論文の限界と今後の展望について議論を行った。

本論文の特色と意義

本論文の意義は、第1に、青年期の時間的展望とアイデンティティ形成に関する研究において有効な時間的展望の認知的側面である時間的指向性の新たな測定方法を提案したことである。その結果、従来の時間的展望研究の知見間の矛盾を統合できる可能性が示された。第2に、時間的展望とアイデンティティ形成プロセスおよびプロダクトとの関連を示したことで、青年がこの時期の発達課題をどのように乗り越えるのかを詳細に明らかにしたことである。第3に、死への展望・意識化と青年のアイデンティティ形成との関わりを実証したことである。

本論文に対して審査委員から、次のような問題点が指摘された。

第1に、青年を対象に死のテーマを扱うことに発達的な意義・妥当性がどの程度あるのか。確かに結果は出ているが、青年にとっての死の意味について、さらに詳しい検討が必要ではないか。例えば、病理傾向や哲学的指向性などの関与も考えられる。今後、対象を変えての検討があるとよい。

第2に、過去の意義についての検討が不足している。過去はさまざまな意味をもつ。特に、臨床的には、過去の意味が変化する。青年期の時間的展望やアイデンティティ形成プロセスと関連づけて、過去を含む時間の意味をよりダイナミックに検討する必要があるのではないか。

第3に、この研究の母集団の定義を明確にすべきである。それによって、得られた知見の意味が異なってくる可能性がある。

第4に、性差が検討されていないが、このテーマに性差が関わっている可能性があるのではないか。

以上の問題点について学位申請者は問題を十分に認識しており、本論文の課題を踏まえるとともに、今後の研究に向けた適切で建設的な応答がなされた。

このような結果を踏まえて、審査委員は一致して本論文を博士（心理学）に値するものと判断し、本論文を「可」と判定した。

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨